

けいさく のすけ



佐藤敬之輔 再考

「佐藤敬之輔再考 明日のタイポグラフィを考える」

日時 2017年9月30日(土) 17時-19時30分 開場 16時30分

場所 桑沢デザイン研究所 6階アトリエ 〒150-0041 東京都渋谷区神南1-4-17

料金 一般2000円 / 桑沢同窓生・タイポグラフィ協会・東京TDC各会員 1500円 / 学生1000円 (桑沢生無料)

主催 桑沢デザイン研究所同窓会 / 日本タイポグラフィ協会 / 東京タイポグラフィディレクターズクラブ

第一部 「佐藤敬之輔再考」

スライドを見ながらのトークショー

登壇者 浅葉克己 小宮山博史

第二部 シンポジウム「明日のタイポグラフィを考える」

パネリスト

作り手 鳥海修 藤田重信 小林章

使い手 葛西薫



9 / 30
2017

参加希望の方は左記のアドレスへメールにてご予約ください。お支払いは当日現金にてお願いいたします。

(桑沢同窓生・タイポグラフィ協会・東京TDC各会員、学生の方は学校名を明記)。

定員120名(要予約・先着順締切) お席は自由席となっておりますのでご了承ください。

桑沢デザイン研究所同窓会事務局 design-iyuku@kds-doso.net

第1部 「佐藤敬之輔 再考」 登壇者プロフィール



浅葉克己
Asaba, Katsumi
アートディレクター

1940年神奈川県生まれ。桑沢デザイン研究所卒。佐藤敬之輔タイポグラフィ研究所において文字設計を修行。64年ライトパブリシティ入社、東レ、キューピーマヨネーズなど商業の仕事で注目を集める。75年浅葉克己デザイン室設立。以降アートディレクターとして日本の広告の第一線で活躍。87年東京タイプディレクターズクラブ (TDC) 設立。会長として運営する傍ら、アジアの文字文化に着目、文字と視覚表現の関わりを追求し、その過程で中国少数民族ナシ族に伝わる象形文字・トンパ文字と出会う。日宣美特選。東京 ADC 各賞。東京 TDC 賞。毎日デザイン賞。日本宣伝賞・山名賞。日本アカデミー賞最優秀美術賞。グッドデザイン賞。紫綬褒章。旭日小綬章。桑沢デザインオブザイヤー賞ほか受賞歴多数。東京 TDC 会長。東京 ADC 委員。JAGDA 会長。AGI (国際グラフィック連盟) 日本代表。六本木男声合唱団幹事。日本卓球協会参与・国際委員。卓球6段。第十代桑沢デザイン研究所所長。



小宮山博史
Komiyama, Hiroshi
書体設計士
書体史研究者

1943年新宿生まれ。佐藤敬之輔に師事し書体設計と和文書体史の基礎を学ぶ。佐藤没後研究所を引き継ぎ、書体設計と書体史研究を柱に活動。書体設計では平成明朝体、大日本スクリーン「日本の活字書体名作精選」、中華民国国立自然科学博物館中国科学庁表示用特太明朝体、韓国サムスン電子フォントプロジェクトなどを制作。佐藤敬之輔と同じように桑沢デザイン研究所でレタリングの授業を受け持っていた。著書、共著に『明朝体活字字形一覧』(文化庁)、『日本語活字ものがたり』(誠文堂新光社)、『タイポグラフィの基礎』(誠文堂新光社)、『活字印刷の文化史』(勉誠出版)など。2010年、竹尾賞デザイン評論部門優秀賞受賞。阿佐ヶ谷美術専門学校講師。印刷史研究会会員。

第2部 「明日のタイポグラフィを考える」 パネリストプロフィール

使い手の立場から



葛西薫
Kasai, Kaoru
アートディレクター

1949年札幌市生まれ。文華印刷株式会社、株式会社大谷デザイン研究所を経て、1973年株式会社サン・アド入社。サントリーウーロン茶中国シリーズ、ユニテッドアローズ、虎屋の広告制作およびアートディレクションのほか、サントリーのCI、六本木商店街ネオンサイン、映画・演劇の宣伝制作、装丁など活動は多岐。近作に「ヒロシマ・アピールズ2013」ポスター、「TORAYA CAFÉ・AN STAND」[atelier shimura]「HIN / Arts & Science」のCI・パッケージデザイン、『建築を考える』『空気感』(ペーター・ツムトア著/みすず書房)の装丁、映画「海辺の生と死」(越川道夫監督)の宣伝制作などがある。『図録 葛西薫 1968』(ADP) が出版されている。

作り手の立場から



藤田重信
Fujita, Shigenobu
書体デザイナー

1957年福岡県生まれ。筑陽学園高校デザイン科卒。1975年、株式会社写研を経て1998年、フォントワークス株式会社に入社し筑紫書体ほか数多くの書体開発をする。「筑紫オールド明朝」「筑紫丸ゴシック」で2010東京TDC賞を受賞。BOOKデザイナー、グラフィックデザイナー必達書体となる。最新の書体、筑紫アンティークシリーズは伝統的な明朝体・ゴシック体に新しい息吹を加えたデザインで、見る者に新鮮な感覚をあたえ、筑紫書体の支持をさらに高めている。2016年、NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演。また「フォントワークスUDフォント」がIAUDアワード2016銀賞を受賞。

作り手の立場から



鳥海修
Torinoumi, Osamu
書体設計士

1955年山形県生まれ。多摩美術大学GD科卒業。株式会社写研入社を経て1989年に有限会社字游工房を鈴木勉、片田啓一の3名で設立。現在、同社代表取締役であり書体設計士。大日本スクリーン製造株式会社のヒラギノシリーズ、こぶりなゴシックなどを委託制作。一方で自社ブランドとして游書体ライブラリーの游明朝体、游ゴシック体など、ベーシック書体を中心に100書体以上の書体開発に携わる。2002年に第1回佐藤敬之輔賞、ヒラギノシリーズで2005年グッドデザイン賞、2008東京TDCタイプデザイン賞を受賞。京都精華大学客員教授。

作り手の立場から



小林章
Kobayashi, Akira
タイプディレクター

ドイツ・モノタイプ社タイプディレクター。欧文書体の国際コンペティションで2度のグランプリを獲得して2001年よりドイツ在住。有名な書体デザイナーであるヘルマン・ツァップ氏やアドリアン・フルティガー氏と共同での書体開発、ソニーやUBS銀行などの企業制定書体の開発を担当している。欧米、アジアを中心に講演やワークショップを行うほか、世界的なコンテストの審査員も務める。2012年のNHK「デザインあ」、2016年のNHK「スーパープレゼンテーション：書体デザインの奥深い世界」に出演して欧文書体デザインの仕事についてわかりやすく解説。著書に『欧文書体：その背景と使い方』、『欧文書体2：定番書体と演出法』、『フォントのふしぎ：ブランドのロゴはなぜ高そうに見えるのか?』(いずれも美術出版社)、『まちモジ：日本の看板文字はなぜ丸ゴシックが多いのか?』(グラフィック社)。